

仙台到着の24日午後林子平墓に詣でている。29日には明治天皇が、子平への褒詞に添えて祭料を下賜された。林子平が世に顕彰されるのはこの時からである。

資料 海国兵談（林子平）

## 118 伊達政宗が藤次郎と称したのは何故か

問 伊達政宗は輝宗の長男であるのに、藤次郎と称したのは何故ですか。  
(1)

答 わが国には、古くから中国流の排行〔輩行、はいこう〕によって、兄弟の年齢順に長兄を太郎、次男を二郎（次郎）、三男を三郎……と称呼する慣行があります。ところが、伊達政宗は輝宗の長男ですから太郎と呼ぶべきにもかかわらず、藤次郎と称しました。この事実が、「性山〔しょうざん〕公治家記録」巻之3に、次のように記されています。

『〔天正五年〕〇十一月壬子小十五日戊辰。米沢城ニ於テ嗣君御元服、藤次郎ト称シ政宗ト名ツケ給フ。……時ニ御年十一歳。』

その理由については、次の諸書がこれを記しています。

1. 「伊達正統世次考」巻之1下（伊達綱村撰）

『当家念西〔ねんさい〕公以来。四代相次。皆以次男承家。当有不得已之由然焉耳。後世不由於長幼昆季之次第。総称次郎。蓋亦職之由乎。』

2. 「性山公治家記録」巻之1（「伊達治家記録」1（平 重道編）の内）

『性山公

公御諱〔いみな〕ハ輝宗、御童名ハ彦太郎、後総次郎ト称ス。……

御代々次郎ト称シ、中古ヨリ互ニ藤次郎・総次郎ト称シ給フ。然レトモクハ略シテ次郎ト称ス。』

3. 「伊達治家記録」1（平 重道編）の内「性山公治家記録」巻之1の編者頭注

『伊達家譜によると2代宗村は伊達次郎、3代義広は栗野次郎、4代政依は伊達次郎、14代植宗、15代晴宗は次郎と称し、16代輝宗は総次郎、17代政宗は藤次郎と称した。宗村から政依まで次男で家を嗣いだので、嫡子にも次郎と名付けたのである。』（始祖朝宗から）

4. 「伊達政宗」（小林清治）

『天正5年〔1577〕11月15日、11才の梵天丸は元服して藤次郎政宗と称した。藤次郎は、次郎および総次郎の称とならんで、伊達累代が襲名してきたものである。』

なお、政宗以下歴代の当主も、元服の時、中には世子と決定した際に次郎と称しています。順にこれを挙げますと下記の通りです。

1 7世政宗（藤次郎）	1 8世忠宗（総次郎）
1 9世綱宗（藤次郎）	2 0世綱村（総次郎）
2 1世吉村（藤次郎）	2 2世宗村（総次郎）
2 3世重村（藤次郎）	2 4世齊村（総次郎）
2 5世周宗 <sup>(7)</sup>	2 6世齊宗（総次郎）
2 7世齊義（藤次郎） <sup>(8)</sup>	2 8世齊邦（総次郎） <sup>(9)</sup>
2 9世慶邦（藤次郎）	[ ] 宗敦（総次郎） <sup>(10)</sup>

注(1) 伊達家 1 6 世。晴宗の第 2 子、幼名彦太郎、後ち総次郎と称す。天文 1 3 年〔1 5 4 4〕9 月、伊達郡西山城に生れた。2 4 年將軍足利義輝の偏名を受けた。永禄 8 年〔1 5 6 5〕2 2 才で家督を相続し米沢城に本拠を置き福島攻略を進めた。元龜 3 年〔1 5 7 2〕後に政宗の師となった名僧虎哉を招き資福寺住職に据えた。織田信長、徳川家康とも修好があった。天正 1 2 年〔1 5 8 4〕1 0 月家督を政宗に譲り、米沢館山城に隠居し受心と称した。翌 1 3 年 1 0 月 6 日帰順を装った二本松城主畠山義継に謀られて人質となり非業の最期を遂げた。公時に年 4 2。法諡して覚範寺殿性山受心大居士という。出羽置賜郡夏刈村資福寺に葬る。翌 1 4 年、政宗は父輝宗の菩提のため長井莊遠山村に遠山覚範寺を建立した。輝宗の靈牌を安置し、虎哉和尚を第一世として開山した。覚範寺は政宗に従い、岩出山から仙台愛宕山を経て、慶長 6 年〔1 6 0 1〕北山の現在地に移ってきた。臨濟宗の名刹で、元和 9 年〔1 6 2 3〕には政宗の生母保春院殿花窓久栄尼大師もここに葬られた。

注(2) 伊達家第 2 世。初諱は為重、幼名は次郎。第 1 世朝宗の第 2 子。従五位下兵部少輔に叙せられた。諸国に伊達氏を称するものは皆その後であるという。生歿年月日及び墓所は不詳。持国院殿念山道正大居士と追諡す。

注(3) 伊達家第 3 世。栗野次郎と称す。第 2 世宗村の第 2 子である。体格拔群、智謀人にすぐれた武将だった。剃髪して覚仏と号す。康元元年〔1 2 5 6〕9 月 2 3 日歿、享年 7 2、追諡して観音寺殿本明覚仏大居士という。従五位に叙し、蔵人大夫判官代に任ぜられた。この代、伊達郡桑折郷栗野大館に移住した。

注(4) 伊達家第 4 世。第 3 世義広の第 2 子。従五位下蔵人大夫に任ぜられた。剃髪して願西と号す。仏教を信ずること篤く、京都五山に擬して、東昌、光明、満勝、観音、光福の 5 寺を創設し、仏智禪師を招請して開基とした。正安 3 年〔1 3 0 1〕7 月 9 日歿、享年 7 5、伊達郡成田村東福寺に葬る。東昌寺殿覚印願西大居士と追諡す。仏智禪師は京都東福寺第 5 世で当時の高僧であったが、政依と同年同月同日示寂した、人々はこれを奇縁とした。

注(5) 伊達家第 1 5 世。1 4 世植宗の子。幼名次郎、將軍足利義晴の偏諱を受ける。左京大夫従

四位下、奥州探題に捕せられる。天文17年〔1548〕家督を継ぎ、後ち出羽置賜郡長井莊米沢城に移る。永禄7～8年〔1564～65〕世子輝宗に家督を譲り、信夫郡杉目城に隠居した。剃髪して道祐と号したが、天正5年〔1577〕歿、享年59、杉目城外宝積寺に葬る。乾徳院殿保山道祐大居士と追諡す。

注(6) 慶長4年〔1599〕12月8日大阪で生れた。幼名虎菊丸、総次郎と称した。慶長16年12月13日江戸城で元服し、將軍秀忠の偏諱を受けて忠宗と改めた。忠宗は政宗の遺業をよく受け継ぎ、藩政の基礎を固めた。藩制の整備と中枢部の強化、二の丸構築と城下東北部の拡張、寛永検地の断行等その治績の主要なものである。治世中屢々洪水・火災等の災害を受けたが、比較的財政は安定して平和なよき時代を生み出したのだった。万治元年〔1658〕7月12日歿、60才。大慈院殿義山崇仁大居士と法諡され、8月6日瑞鳳寺に葬られた。

注(7) 寛永8年〔1796〕3月2日江戸に生る。幼名政千代丸。同年7月27日父齊村死去。9月13日堀田正敦〔伊達宗村の第6子、幕府若年寄〕が藩政補佐に当り、29日当歳で襲封を命ぜられた。多病のうちに、文化9年〔1812〕4月25日歿、年17、青竜院殿紹山隆公大居士と法諡す。5月24日瑞鳳寺に葬る。

注(8) 第11代藩主。諱は齊義、幼名吉五郎。一関の田村村資の第4子。寛永10年〔1798〕3月7日江戸に生る。文政2年に齊宗が病気のため代って藩政に当り、続いて世子にあげられ、間もなく襲封した。文政10年〔1827〕11月27日歿、30才。法諡して曹源院殿正山栄宗大居士という。12月24日瑞鳳寺に葬る。在職足かけ9年、その治世中には城下に火災が多く、文政5年〔1822〕に愛宕山に定火鐘をそなえた。

注(9) 第12代藩主。諱は齊邦、幼名を幸五郎また藤三郎という。登米の伊達長門宗充の長子として文化14年〔1817〕9月28日生れた。文政10年〔1827〕仙台中に迎えられ、その翌年襲封した。その治世は天保飢饉のあった時期で、凶作、洪水、大火などが頻発した。天保4年〔1833〕には粥をすすって、向う10年間は10万石の格式で節約をするという親書を出している。天保12年〔1841〕7月24日病歿、年25、慈雲院殿竜山真珠大居士と法諡す。8月25日大年寺に葬る。

注(10) 宇和島伊達宗城の第2子、幼名経丸、慶応4年〔1868〕伊達慶邦の養子となり宗教と名乗り総次郎と称した。戊辰敗戦により隠退し讓堂と号した。明治3年仙台藩知事に任ぜられ、翌年辞職、英国に留学、8年帰朝。18年別家、21年男爵を授けられた。23年国会開設以来貴族院議員となる。明治43年12月6日歿、63才。第2次大戦時中国大陸で勇名を馳せた伊達順之助はその子である。

資料 伊達正統世次考卷之1下（伊達綱村撰）

性山公治家記録卷之1（「伊達治家記録」1、「伊達家治家記録一性山（輝宗）公・貞山（政宗）公」の内）

## 119 臥竜梅のこと

問 臥竜梅は、伊達政宗が朝鮮から持ち帰ったものと伝えられていますが、それはいつのことですか。

答 伊達政宗は豊臣秀吉の朝鮮征伐に出兵を命ぜられました。文禄2年〔1593〕3月九州名護屋から出帆、4月13日釜山に着岸、朝鮮に在ること5か月、9月1日には釜山を出船、18日名護屋に帰着しました。この時政宗の持ち帰った朝鮮梅が、幹枝の匍匐特性から臥竜梅と呼ばれるものであります。<sup>(1)</sup>この持帰りについてこれを特筆した文書記録の類は見当りません。従って、このことの経緯は不明ですが、その事実のあったことは、政宗自作の次の漢詩によって証明されます。すなわち、

『朝鮮之役載一梅而持帰裁之後園詩以紀<sup>(3)</sup>

絶海行軍帰国日 鐵衣袖裏裏芳芽 風流千古餘清操 幾歳閑看異域花』

そして、肝心の臥竜梅が、幾百年のきびしい風雪に耐え、朝鮮梅の特性を持ち続けながら、松島瑞巖寺境内・宮城刑務所構内・西公園内の三か所に現存していることは、何よりの物証としてそのことを有力に裏付けているものであります。<sup>(4)</sup><sup>(5)</sup><sup>(6)</sup>

注(1) 「貞山公治家記録」巻之18下、文禄2年〔1593〕3月『○廿二日公先日ヨリ名護屋ニ御船ヲ繋ケラレ御滞留ノ所ニ、今日追風能キニ就テ、御船ヲ発セラレ、卷岐国風本へ着岸シ給フ。○四月丁巳大十三日丁酉……公彼地ニ十四五日逗留セラレ、今日始テ朝鮮国釜山浦ニ御着岸ナリ。……』

注(2) 「貞山公治家記録」巻之18下、文禄2年〔1593〕『九月壬戌小十一日壬戌。殿下ヨリ今度朝鮮ト御和平ノ義既ニ相済ノ間……公ハ一番ニ帰朝セラルベキ旨仰出サレ……今日釜山浦ヲ出船シ給フ。……○十八日己巳。公名護屋ニ御着船。』「宮城県史」第1巻に『彼<sup>×××× ××××</sup>〔政宗〕が朝鮮に上陸したのはその翌年（文禄二年）で……文禄三年〔1594〕に日本に帰ってきた。寛永四年〔1627〕に政宗が築城し、現在は刑務所になっている若林城（古城）の臥竜梅（天然記念物）や瑞巖寺の八房梅は、彼が朝鮮からもってきて植えたものと伝えられている。』とある中で、政宗の帰朝を文禄3年としているのは誤りである。

注(3) この後園とは仙台城中であろう。その時期も慶長6年〔1601〕であろう。文禄2年〔1593〕持帰ってから、仙台に定植することになるまで、臥竜梅は岩出山に移植してあったものであろう、資料がないので推定である。